

特42

750

明治十四年八月

日蓮聖人  
妙法正行錄

初編

020066-001-7

特42-750

日蓮聖人妙法正行錄

金田 儀兵衛 / 刊

M14-15

ABH-0266





凡例

高祖聖跡往々口碑ふ傳ふ元より才學衆  
ふ秀給ふ經律論ハ三藏ふ越へ諸宗の偽  
絶て廢し法華經の微妙成と究奮激とて  
妙法乃七字て弘行志諸宗て惡魔化道宗  
と罵り身て裂劔難遠流難行苦行とて諸  
人て解脱濟度志給ふ釋迦の先言無邊成  
哉未法萬代ふ漲る未廣はつて數萬の寺



院改宗を其英名萬國よ轟々本年日蓮大  
菩薩六百年回ふ當高祖御一代の難行苦  
行と巨細ふ編輯し看客の讀益を御題目  
因縁戦々競々と志て善巧方便の端とや  
云可かる舞

紀元二千五百四十一年

明治十四年八月

東京竹芝浦乃住居

金田爲成述

特42  
750

日蓮聖人妙法正行錄 初篇

日蓮聖人御系圖の事

並安房國小湊ふ御誕生の事

一天雲盡て日月淨を四海風收つて萬邦寧かゝぬ  
例ハ何とト爰ふ賢を本地四八の妙相披露し日  
本國東海ふ應生し未法萬年の闇を照給ふ日蓮大  
士俗姓の先蹟遠を考がふとば天津兒屋根の神  
裔ふして皇極帝の御時大臣入鹿父子の惡逆を伐



て天下の静謐を奏爲る正二位大臣鎌足公よて十  
二代の正嫡備中守共賢正暦元年夏の頃京都を去  
て遠江國村櫛と云る村里に住居爲ふ其身男子無  
事汝歎き神ふ其傳統の冥助汝祈念事久し寛弘七  
年庚戌の正月元日同國引佐郡井谷明神ふ参詣し  
神前ふ祈誓汝凝るる時祠の前瑞垣の邊に稚兒の  
啼聲を共資怪みて立出見ると橋の樹の根と筒井  
の邊に綾の衣を包むる最美しい嬰兒あり抱揚て

是を觀ふ氣高き男子ふて眼の光初空の旭日ふ耀  
き尋常ふらぬ稚兒ふ有るを共資是は神の賜  
ふふんと懐抱歸て我が子と志て此汝慈愛養るる  
が生長ふ順ひ雄力猛々智慧も亦萬人ふ優を共  
資我が娘を配合て備中太夫共保と喚び初て姓汝  
井伊と名乗彼の神前の奇瑞を以て井桁ふ橋の家  
の紋所と定るる斯て共保の嫡子備中次郎共家其  
子九郎共直其子新太夫惟直惟直の子と赤佐太郎



盛直ふ三人の子あり嫡子ハ次郎良直次ハ三郎俊直次ハ貫名四郎政直同國山名郡貫名ふ領居爲ゆ  
一貫名を以て姓とぞ此は日蓮大士の祖先か  
此の四郎政直ふ二人の子あり長男ハ四郎行直次ハ六郎直友ふり行直の子重實重實の子又二人あり  
一男ハ早世と次男ハ次郎重忠と云ふ重忠ふ五人の子あり嫡子ハ藤太重政次ハ早世と次ハ仲三重仲次ハ日蓮大士未子と藤平重友と號し此子孫

藤平城姓とて今猶上総國大野の郷ふ存在爲す  
一切の江河海ふ入て皆一味の賊と成か如き在家の四姓沙門と成て後ふ姓ふし爰城以て其委悉城盡さば但其來歴城記ふ那舞有る此時ふ當て右兵衛佐源頼朝郷ハ平家城西海ふ追落し相州鎌倉ふ府城立て四夷八蠻城伐鎮見武威と天下ふ耀と折から貫名次郎重忠も政直以來遠州山名郡ふ在て鎌倉ふ参勤し我々領地の民を憐と文城講し武



坂磨き舊き家名坂落をトと朝暮勵む時忘るるを  
當時源家の執權職北條四郎平時政密ふ諸國へ人  
と馳て二心ある武家坂探り是を誅して天下の愁  
坂除事恰も秀坂拔て五穀坂養ケ如し貫名次郎重  
忠ハ性質忠直ふして詔ふ色ふを武備坂遅忘うし  
て其職を勤む大孝ハ孝ふ似て大忠ハ不忠ふ混ト  
平家の殘黨ふ志坂通爲哉の由怪とふ預り鎌倉ふ  
召寄糺明坂も遂に罪無とて所領坂沒收し安房國

長挾郡ふ流罪と成しハ建仁三年五月七日の事成  
き其栖可方とてハ東條市河の郷小湊と云る海濱  
ふて浦山近々松乃嵐の吹暴て寢覺の床ふ夢も結  
ど昨日はて賑ひ暮爲る男女の影も止に所領ふる  
どハ粟飯どふ炊を可き活計も非に斯て果登き世  
の住家からハ舊き由縁坂求見下総國路野邊ふ  
る大野吉清ケ娘梅菊女と迎て妻とふしぬ此ハ清  
原氏ふして舍人親王十世の孫裔世ふ賤かゝぬ身



ふ何ぞと夫の罪無して配所の月ふ憔悴給ひし面  
影を勞り磯ヶ根ふ甘海苦を搔て日の暮る坂産業  
ぞ夜ハ麻を績網を綴て宵の更るを知らざ夫の次  
郎も沖の小舟ふ命をほかせ鉤をる海士の群ふ入  
て漁師を事とし妻も夫も軀ふ馴ぬ賤ヶ仕業も常  
とあり其暇ふハ郷の童等ふ筆握術ふど教導ふ  
在し昔の思きて物辨ぬ伏屋の内ふも敬も富じし  
もあぢきども物不足無々暮るる梅菊女ハ幼稚よ

り神ふ佛ふ能念ト事あるケ此小湊の浦ハ日本の  
東海ふして朝日ふ遮る島山もふし梅菊女ハ朝ふ  
く窓の戸もむ曉天ふハ明る間遅と起出つく  
身と淨ふし香を焚夫の行未兩親の延壽坂祈念  
ぬ日とてハあかやる斯て承久三年夏の初梅菊  
女ハ夫の次郎ふ語やう今宵不測の夢ふぞ見つ  
常ふ更ふぞ日天子坂拜つく見仰むハ日輪の光明  
耀り八葉の金蓮華ふ乗給ひ海上遙ふ飛來妾ケ懐



ふ入と見て驚き覺てはべるがし婦女の愚ふる心  
より正なき夢見つるよと叱給ふと有るまは次  
郎重忠も愕然として驚き我も日永の疲ふて眠む  
中ふ最も尊き白髪のお翁が玉の如き稚兒を掌の  
上ふ居へ是は汝ふ授け能養て出家ふ爲よと再應  
再三懇ふ指示給ひぬ此は不測ふる夢想かふと互  
ふ語合給ふる夫より梅菊女は懷妊身と成給ひ櫛  
の柏ふ秋告て海原をくき時雨雲夜半の霞ふ鐘更

て何と氷る算水の音もとどし冬空今年も  
夢と暮ふるるり明は貞應元年壬午の春時ふ人皇八  
十五代後堀川帝萬機の政事を攝て四海を撫育成  
給ふ又鎌倉ふは四代の將軍藤原賴經公あり此は  
右大將賴朝郷の血縁成給て以後室二位尼政子の  
方乃計ひふ自て二歳の時鎌倉ふ請迎へ當年五歳  
ふ渡被給ふが將軍と仰奉り二位政子の方は玉簾  
の中ふ將軍が護り武門の仕置天下の成敗公家の



進退はて皆おれ政子の方寸ふて殊ふ舎弟北條相  
模守義時ハ當時の執權職を壽永元曆の國亂も  
昨日乃噂と消果て今ハ言の葉ふ掛て云出る人も  
無金鎌倉山の星月夜日本の大小名弓箭取身も取  
ぬ身も心と鎌倉ふ寄ぎるハなを諸侯の邸宅雲城  
颯へ神社佛閣霞と棚曳街を開き衢城分け朝市夕  
店の繁昌ハ谷七郷ふ賑ひて新玉の春幾萬代り立  
かゝり盡せぬ聖代の壽きハ其頃中納言基綱郷の

歌ふ

吾妻路乃多々郡の其中ふ以かて鎌倉繁へ初るん  
と詠給ふも其繁昌ハ知るる斯て房州小湊  
の浦ふ奇異乃事おぼろむ此里近き磯村ふ誰ケ植  
置し種もあき蓮の若葉の生出て立葉巻葉の茂合  
ひ頓て白蓮華の咲出るふ華葩大いふとて其色  
白銀の如き旭日ふ輝き最美麗を見あはる此遠  
近の心あき浦人もあ不審夏あふてハ咲ぬとき



くし此華の未風寒ゆる雪霜ふ斯を珍ををきき  
るハ此浦ふ目出度事の有もやどると最と鷺を見  
物ぞ此の吉瑞の跡と見て蓮華淵とて今ふ猶其名  
所の残るや借も去つとし茲ふ配流を貫名次郎  
重忠其妻梅菊ハ此二月の十六日曉天より産の氣  
付給ひ此日如月の空最長閑ふ風も止紅旭潮ふ晃  
渡り差入庭の柴垣ふ今と盛の梅乃宿今日も來馴  
し黄鳥の法々華經の聲へ潔を次郎重忠ハ身と清

見日天子拔拜し妻の安産と禱る産舎の内ふハ  
得ふ々ぬ妙香の薰り高を午の刻斗ふ玉の如き男  
子出生成給るや此浦人の我もくと音信て悦云  
者引んき々ぞ中ふも齡高老人て望陀木綿の布子  
をへ折目の見ゆる村長ケ門口より次郎の主よ是  
見給へ係る不測の事有と呼立被て次郎立出で見  
て何とハ薺花を前裁ふ忽ち泉の涌出て高を吹  
上滔々と珠波飛たて潔を流るふ花伴ひ此の清泉



汲て産湯とふせり彼と云ひ此と言夢の奇瑞も  
夢ふと此兒の生前以何ふんと人ふ言と二  
親の心内ぞ頼母と全母梅菊も安ふ肥立此稚  
兒の面貌と見ふ額廣を眉高く鼻正敷とて色最  
白く口の氣息香薰く其容儀凡ふと日天子  
の吉瑞ふ因て善日曆と是を名付日ふ添ひ月汝重  
つと蝶と追ひ花汝摘て最壯健ふ生立給るる實ふ  
去法五濁の颯浪汝凌ぎ經王法華の利益汝三千界

と見給ひし日蓮大菩薩ハ此稚兒ふ在る也然  
と以て昔と逆算とバ大聖釋迦牟尼世尊月  
於て入滅在々ある其年より正法千年  
過終て去法ふ入て百七十一年如來の滅  
去法千  
千七百七十一年ふ相當る彼の月氏の釋  
迦如來ハ西天の國王と生て本果妙の功德汝三界  
此の日本の日蓮大士ハ東海の下賤ふ生  
利益汝閻浮提ふ耀給ふ彼ハ西天の月



汲汲と産湯とふせり彼と云ひ此と言夢の奇瑞も  
夢ふく此兒の生前以何ふんと人ふハ言也二  
親の心乃内ぎ頼母と母梅菊も安ふ肥立此稚  
兒の面貌と見ふ額廣を眉高く鼻正敷とて色最  
白なり口の氣息香薰く其容儀凡ふは日天子  
の吉瑞ふ因て善日磨と是と名付日ふ添ひ月汲重  
く蝶を道ひ花汲摘て最壯健ふ生立給るる實ふ  
法五濁の颯浪汲凌ぎ經王法華の利益汲三千界

三見給ひし日蓮大菩薩ハ此稚兒ふ在る也然  
と以て昔と逆算もハ大聖釋迦牟尼世尊月  
満ちて入滅在々ある其年より正法千年  
正法千年過終て末法ふ入て百七十一年如來の滅  
後百七十一年ふ相當る彼の月氏の釋  
迦如來ハ西天の國王と生て本果妙の功德汲三界  
を治りて此の日本の日蓮大士ハ東海の下賤ふ生  
れ利益汲閻浮提ふ耀給ふ彼ハ西天の月



氏此ハ東海の日本あり彼の入滅ハ二月十五日此  
誕生ハ二月十六日天竺の法華經ハ西より東ふ傳  
へ弘ほめて正像二千の雲袂拂ひ今日日本の題目ハ  
東ふ發り反て西ふ進と弘つて未法萬年の冥と照  
と先聖後聖誠ふ符節袂合爲ケ如し佛法修行專輩  
ハ係る大因緣袂辨へ知て茲ふ悟入爲ハ無量億劫  
ふも得脱の道有不可と茲思はせざる實ふや拈檀  
の二葉頻伽の卵殼善日曆ハ日ふ増し智慧付て父

と慕ひ母ふ這負る頃より人ふ愛憐深を唯暇初ふ  
懷抱忝せし人も長を是袂最愛と磨も亦一度掌打  
愛をる袂ば日と歴て能を遣給ぞ慈母の懷袂るが  
ぞ乳を不吐三四歳の頃より世の七八歳の小兒  
の動靜ありて最長敷を常ふ家ふ在て母の爲ふ塵  
袂拂ひ席を淨る乃手と扶々父の側ふ事てハ墨袂  
摺あるハ茶袂ほひらせ萬態ふ心袂配事いと不  
測ふ思わせざる今宵も浦の夕月ふ里の頑童の三



四人友達顔ふ音信て燈火の影ふ居倚昨日ハ彼所  
の磯ふ榮螺拾ひぬ今朝も脊戸の楊ふ繭をして  
雀と多と捕るハと鄙風をる片言もて己ケ様々  
語ぬきく善日曆ハ頭棹とて以哉とよ曆ハ去頃慈  
父の寝物語ふ聞はるりぬ程近き事あるケ京都ふ  
山蔭中納言と云る人在て或日挂川と云ふ河原  
ふ往行給ひし茲ふ鴨飼業とどる賤の老爺有り  
て大きふる泥亀取捕へて殺さんとせし取山蔭の

郷最憐と見ふ添給し衣服一ツと其料ふ取らせ亀  
と放ちて遣給ぬ其後山蔭殿ハ太宰の少貳と云る  
官ふ成て家の男女を引具して船ふ打乗筑紫をさ  
して下向給ふ此郷ふ若君有りき母ハ繼母ふて有  
る也ハ深々心ふ悪と居て折社よる也と過の様ふ  
此兒と舷より投落爲とク不思儀や此兒波の上ふ  
有て沉給ハ能々見て在る也ハ數百の亀の甲海  
ふ浮び其兒と棒戴て衣服をへ濡せりと取其儘取



揚妻坂ハ路より京都ハ道遣給ひし其若君後ハ出家  
家トて如無僧都トて道德高き聖僧ハ成給ぬ此事  
内裏ハ聞ハる事ハ後白河の帝より三年の間諸國  
ハ殺生坂禁給ト聞令生あるもの誰カ命の悲カ  
らざるべき其身等も今ハ人トし生立ハ浦の朝網  
夕網ハ數限なき命坂取世の稼業の澁猿令取被命  
も取人も俱ハ逃トぬ惡業ハば責而幼き其内ハ  
も無益の遊ビハ殺生せどは同ト報も薄かるべし

と歩唇舌ハ語給ハハ理も非も譯ぬ賤の兒ハ欠伸  
トて眼を擦り板金剛ハ藁履坂搔探ツ歸るハ斯  
て次郎夫婦も善日曆ハ心盡の孝行ハ年月ハ憂ト  
忘テ暮るハ嘉祿二年戌の秋鎌倉ハ二位の  
尼政子の方世ト去給ハ將軍御齡些ハ九歳ハ御坐  
テ世の人浮雲の思坂折柄六月九日辰の刻美  
濃國蒔田ハ莊ハ大雪降テ積ハ一尺餘夏の日  
影ハ窓ト閉爐坂開き酒を飲テ漸令寒ハ凌よし



同十六日鎌倉に註進と又武藏國金子の郷にハ雪交の雨降出後ハ大霰とあつて禽獸多々打殺爲とぞ其上鎌倉にも大路小路に霜の降おと雪の如く六月の中雨乃と降つとき晴る空無風いと寒して手足も冷凍るり同七月の初奥州ハ小礫坂降おと雨よりハ繁金廂を碎き扉破り人の傷付るも最多かりとぞ是は依て今年十二月十一日改元ありて明ハ安貞二年善日曆七歳此年京鎌倉

洪水ふして人馬の死滅大方ふとぞ此より打續き五穀登ふとぞ諸國に疫癘多々又辛の卯四月廿八日鎌倉の御所ふ恠き鳥數千飛群り其形鳩の如くにして色黒く啼て不吉の聲を傳へ姑とて何地ともふを飛去るや鎌倉の僧俗其鳥を見知爲者ふ何らと況て其名汲識る人もあし何なる凶變の惡瑞ふやと思うち八月大風洪水田畑山林を荒し翌年ふ至り天下大飢饉時の執權北條相模平泰



時五十條の憲法立て國政勵ども四海の困窮  
此ふ究り衣食無き民ふ仁義ハ教難し活る京鎌倉  
の形様波風の便ふ聞ふつ々貫名次郎重忠ハ妻の  
梅菊ふ物語やう善日磨も早十歳と超ぬと里乃  
友達と物評ひ爲事もあま走狂ぞ殺生せぞ魚鳥の  
内波啖事波好ど誰教ぬと神ふ謹と佛と敬ひ親の  
機嫌波伺ひつ山ふ登て學問をして給とや出家を  
して給と聞事と胸潰と彼と云ひ此と云ひ思

合とハ十年の昔御身磨と懷妊爲折出家ふせよと  
靈夢の告我も五十路波越ふが頼方ふき片海の  
此小湊の浦遠く罪ふき罪ふ身波沉見浮ぶ時ふき  
宿世の因縁せえて磨と出家とせを先祖の道福身  
の得脱御身も我も後の世乃深き功德のふかふと  
やと夫の語とバ妻も悦び善日磨ふ示々の緒いひ  
諭し良師もがふと思うも其年も暮天福元年癸巳  
四條天皇御諱ハ秀仁後堀河帝の皇子にして去年



の冬八十六代の王位被踐給ひ今歳に於るき四方  
の春人の心も世の沙汰も稍穂ふ成ふを愛ふ小  
湊よと北ふ當り程遠かた清澄と云ふ山寺あり  
真言密宗の靈山ふして寶龜二年の開基なり此頃  
の住職道善密師と云ふは道德も高よし聞傳へ次  
郎重忠の曆被開き吉日被撰び善日曆被携へ清澄  
ふ登り諸佛坊ふ御坐を道善師ふ相見むげ此曆被  
徒弟ふあきて給むと懇懃ふ頼るふ道善師も

最快よを受肯つ善日曆々容貌の優美ふして是  
き被見て且感と且歡び頂髪を搔撫つ賢き兒は今  
日よりハ藥王曆と改名せよと其儘此山ふ正る  
ふ被慈父貫名次郎重忠ハ悦び暇乞し急ぎ歸宅と  
て妻の梅菊ふ話やう今日曆被寺へ伴ひ行き師の  
御坊ふ對面致し委細被願爲處御坊ふ悦は  
今日より名を改て藥王曆と成爲と話ハ妻梅菊を  
俱ふ悦び給る



明治十四年八月五日御届

東京府平民

編輯兼出版人 金田儀兵衛

芝區本芝壹丁目拾三番地

